

7 Impending paradoxical embolism (IPDE) の症例

真田 明子・勝海 悟郎・吉田 剛
 伊藤 英一・田辺 恭彦・後藤 達哉*
 三島 健人*・島田 晃治*・大関 一*
 県立新発田病院循環器科
 同 心臓血管外科*

〔症例1〕91歳，女性．呼吸困難を主訴に入院した．入院時のCTで深部静脈血栓症，肺塞栓を認めた．また経食道心エコーで卵円孔に補足された右房内血栓が認められIPDEと診断された．ヘパリンによる抗凝固療法を開始した．第4病日に呼吸困難が悪化し，血栓が消失していたことから肺塞栓症の再発が考えられた．その後，状態は改善し独歩退院した．

〔症例2〕74歳，男性．意識消失発作，胸痛で入院した．入院後の経胸壁心エコーで卵円孔を介して右房から左房に貫通する血栓が認められた．CTで肺塞栓症，深部静脈血栓症を認めImpending paradoxical embolismと診断した．動脈塞栓症の危険性があると判断し，血栓除去術，および卵円孔閉鎖術を施行した．術後経過良好で独歩退院した．

〔症例3〕48歳，男性．意識障害を主訴に入院．頭部CTで左中大脳動脈の梗塞を認め，ウロキナーゼによる血栓溶解療法を施行した．塞栓症が疑われ，経食道心エコーを施行したところ，卵円孔に補足された右房内血栓を認め，奇異性塞栓症による脳塞栓症と診断された．CTでは深部静脈血栓症と肺塞栓症が認められた．

IPDEは静脈系に発生した血栓が卵円孔や心房中隔欠損を介して右房から左房に貫通している状態を示す．現時点ではまだ治療法について確立したものはなく，比較的稀な症例であるため文献的考察をふまえて報告する．

8 ワルファリンと抗血小板薬併用症例の検討

寶田 顕・佐藤 政仁・後藤 雅之
 小黒 武志・松下 宏興・富田 任
 齊藤 淳志・布施 公一・藤田 聡
 池田 佳生・北沢 仁・高橋 稔
 岡部 正明・相澤 義房*
 立川綜合病院循環器内科
 同 研究開発部*

当院における心房細動症例に対する抗血栓療法の実状と問題点を検討した．

【対象と方法】対象は2006年1月から2011年10月まで当院でワルファリンを投与された3094例のうち無作為に抽出した非弁膜症性心房細動例515例である．平均年齢は73.3歳(36-94歳)で，男性は326例(63%)であった．ワルファリン単独群(以下単独群)396例と抗血小板薬併用群(以下併用群)119例で，経過中の血栓塞栓症と重大な出血性合併症について検討した．平均経過観察期間は4.2年であった．重大な出血性合併症は輸血，入院，外科的な処置が必要な出血と定義した．

【結果】ワルファリン導入時あるいは2006年1月の時点でのCHADS2スコアは平均で2.3であった．単独群に比較し併用群は男，脳梗塞既往症例が多く，平均CHADS2スコアも高かったが，ワルファリンコントロールの指標であるTTR(Time in Therapeutic Range)に両群で差はなかった．脳梗塞・全身性塞栓症の頻度に両群で差はなかったが(単独群1.4%/年VS併用群1.6%/年)，大出血の頻度(単独群1.0%/年VS併用群2.4%/年P<0.05)，頭蓋内出血の頻度(単独群0.5%/年VS併用群1.6%/年P<0.01)は併用群で高かった．また抗血小板薬2剤併用例で頭蓋内出血の頻度はより高値であった．頭蓋内出血のうち約半数が転倒に伴う硬膜下血腫であった．

【結語】ワルファリンと抗血小板薬併用により転倒に伴う硬膜下血腫のリスクが高まる可能性があり，生活指導等による予防が重要と考えられた．